甲斐木喰上人の思想と信仰

中　里　日　應

目　次

㈠はじめに
一、柳宗悦氏の木喰上人の発見と事蹟の研究について
二、木食行者とは
三、略　伝
㈡甲斐木喰上人の思想と信仰
一、十　大　願
第一願　天等大供養法門
第二願　日本廻国八宗一見
第三願　仏作願心十方カフカ
第四願　有情四百衆病見
第五願　一切衆生一夜説法
第六願　無別方便戒海水心
第七願　高ヤ常光明真言
第八願　常念仏因縁ノ所ニ
第九願　一切経衆生アンイノタメ

第十願　千体仏因縁トチ
二、帯金金竜寺日蓮聖人影像
三、上人影像の種類
四、上人法名の変遷について
1、三界無庵無仏　木喰行道
2、天一自在法門　木喰五行菩薩
3、神通光明　木喰明満仙人
五、上人の木食行について
㈢　現代栄養学への提言
㈣　おわりに

㈠「はじめに」

「木喰」と云う名は、しばしば耳にしたことはあるが深い関心も持たず、従って「甲斐の木喰」が果して何時頃の人で、如何なる生涯を送った人かは知る由もなく、又深く知ろうともしなかった。ところが身延町において文化財研究の方々が〃下部町の丸畑という辺鄙の山の上の部落に「木喰上人」の生れたところがあり、又その近くの永寿庵と云うお寺には、木喰上人の彫刻した五智如来の像があり、更に身延町帯金浄仙院下の薬師堂には上人作の薬師如来像が祀られてある〃と云う話を聞き、それから幾日か過ぎて好奇心にかられて薬師像を拝みに行ったのが、縁のはじまりであった。帯金部落は身延山麓を流れる富士川を距てた川岸に近い部落であるが、そこの薬師堂は木喰上人が寛政十二庚申年十月廿六日、八十三才の時に製作した薬師如来像が安置してあるお堂であり、その堂は間口一間半奥行一

間、トタン葺のごく粗末のものであった。この堂も恐らく像を安置するために上人が村人の協力を得て建てられたものであろう。百数十年間の風雪に堪え、日光に曝されて畠の中にポツンと立っている、大人が二人で押し倒せるような荒れ果てた粗末なお堂である、その中に背丈一米余の薬師如来像が片すみに祀ってあった。祀ると云うよりは、ほこりだらけになって置いてあったと云う方が、ぴったりきそうである。私はその像を格子越しに一見した、今まで寺々を廻って多少の仏像は拝んだがこの像ほどの変った彫刻を未だ曾て見たことがない、〃一丁の鑿（のみ）に托して作者の心境を彫り出した〃と云う感じであり、大胆な而も卒直な刀法に度肝を抜かれたかたちであった。

それ以来一見稚拙と思はれるような不可思議な刀法によって表現された像が、眼底に焼付いて離れることがなかった。恐らく印度、支那、朝鮮、日本を通じてこのような刀法によって成された仏像は皆無であろうと思はれる。

更に今夏、文化財研究の同志と共に、丸畑の木喰上人の生家を尋ね、上人自筆自作の資料を拝見することが出来たのは感激の極みであった。即ち

一、背負櫃＝杉板長さ四四、五糎。巾二四、五糎。深さ二一、六糎、厚さ八粍。この内容品として、
二、御やと帳＝半紙横折四枚。寛政九己四月より十一未年十月二月まで
三、神徳丸
四、集宝帳―歌。
五、四国順礼手引付集帳
六、題（菊・紅葉）歌集
七、新宅屋札次第

八、光明仏御堂
九、御詩歌帖
十、南無阿弥陀仏国々御宿帳＝半紙横折十六枚、安永九子五月十四日より天明八申四月廿日まで、及び寛政十一未四月廿六日より十二申十月終まで。
十一、心願
十二、懺悔経諸鏡
十三、四国八十八ケ所詩歌
十四、四国堂心願鏡
十五、納経帳＝紙数二百二枚。安永二巳二月より天明五巳八月十九日まで、外に寛政三亥九月の分を含む。
十六、百八講
十七、歌集（背表紙）
十八、紙札（二枚）
十九、十三人講札＝杉、丸札。直径二四糎、厚さ一糎。
二十、版木＝栃板、丈三八糎、巾十一、五糎。厚さ一、五糎。
外に
一、薬師如来墨画像一幅＝丈一米六〇糎、巾六五糎、八十九才作等である。
木喰上人入寂して、百六十年後の今日まで上人が日本廻国の途次常に所持した記録の類、或は行く先々で折にふれて

詠んだ歌帖の殆んどが生家伊藤家に所蔵されていることはまことに稀有のことである。尤も先年子供達の火遊びにより失火、伊藤家が全焼するの災厄に遭った際にも、〃ほかの家財道具は皆焼けたがこれだけは倖に持ち出すことが出来た〃と、当主の伊藤平歳氏は語っておられた。洵に上人の霊の加護の賜と痛感し一入の感激を覚えた。

この資料が伊藤家に現存するについては、木喰上人は廻国順礼の途次、文化七庚午六月五日九十三才で甲州上の原にて入寂、直ちに丸畑の生家に飛脚が来たので、伊藤家の長男某（十八才）が単身葬儀に赴き葬送を終えて前記の負髄を背負って戻って来たと伝えられている。

その時の長男某の話しに「木喰さまは木乃伊（みいら）になっていた」と云う話しが今も残っている。

即ち木乃伊（みいら）になるには五穀を食せず、蕎麦（そば）、芋（いも）、木の実、野菜等を常食して入寂すれば木乃伊になると伝へられている、而も人間の肉体は〃七年経過すれば細胞が一変する〃と云はれているので最底七年の歳月の木食を必要とするであろう。西紀三五九年頃入寂した単道開と云う人は、五穀を食せずコノテガシワの葉を主食として苦行七年にして、木乃伊（みいら）となったと云はれているが、木喰上人も木食戒を受け五穀を断って五十年、死して木乃伊となるのも当然と思はれる。

一、柳宗悦氏の甲斐木喰の発見と事蹟の研究について

甲斐木喰上人の発見については、柳宗悦氏が大正十二年正月九日から大正十四年三月まで、満二ケ年間文献と遺跡と作品とを追い求め苦心研究の結果が、雑誌「女性」に七回にわたり連載された「木喰五行上人の研究」を初めとして、更にその後柳宗悦選集第九巻に増訂された「木喰上人」によって、その全貌を明らかにすることができる。そしてその上人の略伝縁起の中にも、冒頭に「因縁に導かれてこゝに発願し木喰五行菩薩を綴る」と記している如く、大正

十二年正月九日甲州池田村の小宮山清三氏のところへ、朝鮮の陶器を見るために甲斐の旅に出たのが抑々の縁のつながりとなり、初対面の小宮山氏の宅を訪れた時に二三体の仏が暗い光を斜から受けて、扉の前に置かれてあった、その前を過ぎようとした時私が投げた一瞥は思いがけなくも微笑む彼等に迎えられた、その刹那私はその価値が尋常でないことを直覚した、そして即座にその微笑の中で私との交渉は開始された」と述べ、又「尋常な作者ではない、異数な宗教体験がなくばかゝるものは刻み得ない」と直感し、それ以来物の怪に憑かれたかの如く、「過去八ケ月の間、間断なく企てた研究の結果である。併し一切は処女地であった、それは（木喰上人）誰にも顧られず暗い草樹の蔭に匿れて長い年月を過した。私は怠りなく根を堀り、草を去り、鋤を入れたつもりであるが、更に耕さねばならぬ土壌は残り、除かねばらぬ石は多い、それは今後一層深き注意と努力とを要するであろう。然し植えつけた種は既に若芽を崩し今や日光を浴びて育ちつゝある。その花の美が人を惹き、その熟せる実が心の糧となる時はやがて来るであろう」と述べ、数年の歳月をかけて遺された資料をたよりに、五十年間の上人の足跡をたどって隈なく調査研究され、その伝記と事蹟並に現存する彫刻とは概ね完成された感がある。

然し上人の思想信仰の面に関しては〃未だし〃の感を深うするので、私は私なりに上人の十大願を本として、その精神面を堀り下げて見たいと思う。但しこれは飽くまでも、柳先生の研究された「木喰上人伝」を基本として、筆者の主観によって記述したまでゝあって観察は妥当を欠き、著しく上人の真価を損傷しはしまいか、と衷心忸怩たるものがあるがその責はすべて筆者の負うところであり、若し倖にしてこの一文が後人の、上人研究のよすがとなり、上人の偉大性を理解する機縁ともなれば幸甚の至りである。

二、木食行者とは

所謂「木食」と云へば木食戒を受けて修行した者について名付けられる名称であるが、木食戒を持つものは真言宗の僧に多い。

木食戒とは「肉類や、五穀を食せず菓実のみをたべて修行することである」とし立印記には「菜食念誦をなせ、数十万遍に満ぜよ」と、又、底哩三昧経に「修行者菜食長斎せよ、或は菓子、誦して十万遍に満ぜよ」とあって、真言宗にて不動明王の八千枚護摩を修行する時に行われる行食で、即ち七日間木食にて毎日三時に不動法を誦し、不動慈救咒を総数十万遍誦し、最後の一日は一昼夜断食してその日に八千本の乳木を焼く行であって、強盛の信念の者でなくては到底行うことが出来ない行であるとされている。

要するに真言宗の木食戒と云うのは、修行のために或る一期間を限って五穀を食せず修行に専念することである。

従来木食と呼ばれた人は、木食応其、木食行者願空誓阿、木食朝意、木食観海、木食五行、木食白道、木食丹海等殊に徳川期には多くの木食行者が出て居るが、中でも「甲斐の木喰」はその名に相応しく、五十年間戒を持ち続け、日本廻国の大願を樹てその行程五千里、「広度衆生」と「千体仏造立」の悲願を満じ九十三才で入寂する迄「三界無庵」の生涯であった。

上人の句に

「木喰のけさも衣も　むしころも
　きたりしいたり　ねたりおきたり」

「野宿とも思はず　こゝにまよひきて

はらにみはなし　やねはなほなし」

「日はくれる　山たにこすも　なにやらん
　あめ風ふゞき　しのぐつらさよ。」

と、廻国修行の姿と苦行の心境を詠んだ歌が残されているが、物質至上主義に活きる現代人には到底理解できない人生である。而もこれが戦国乱世の時代ならいざ知らず、太平を謳歌した徳川の全盛期に出世し、且つ甲州人の「功利主義」と「ねばり強さ」の二つの性格を修行の功によって見事に醇化して、宗教家としての理想像を体現したことは洵に見事である。

恐らく甲州の産んだ聖僧として今後益々光彩を放つことであろう。

三、略　伝

上人の伝記を略述する所以は、本稿の目的は甲斐の産んだ偉大なる聖僧、木喰五行菩薩を紹介する意味も多分に含まれている、仍て上人自作の略仏とも云うべき「四国堂心願鏡」の全文を掲げることゝした。

四国堂心願鏡　施主　当村中　講中　（原文は漢字片仮名まじり）

一、日本順国八宗一見之行想拾大願之内本願として仏を仏師国々因縁有所にこれをほどこすみな日本千躰之内なり帰命頂礼法身阿字一念仏法　至心信広説普遍誓願事　懺悔衆生法門度法界金剛諸仏同一体三世浄明自在　無家木喰五行常観心コレハ自至心信常心の本願ナリ

「元来、此木喰五行菩薩事は、当国当所丸畑村の出生也。当所を出る事十四才の歳に、他国江戸表に出て、様々

無量の奉公を励み、度々出世する事、度々あると雖も、運来たらざれば浪人する事、度々に及ぶ。其節、相模国石尊へ参籠致し、大山不動へ心願の大徳に依って子易町に一宿致し、宿日待の夜に泊り合せ、其僧は濃き真言宗師にて、因縁に預り、其所に於て師弟子の契約を致し、（廿二才の歳也）出家相続を、至心に信じて修行怠らざれば、益々自心も安意に適い、其道に入て修行の後所々の寺を住職遍歴して、其後日本廻国修行せんと大願を起して発心する事四十五歳の年也。其節常陸の国木食観海上人の弟子となり、木食戒を承ぎ、凡そ四十年来の修行也。凡そ日本国々山々嶽々島々の修行を心に掛けて、日本粗々成就に至る。其節、九州修行の節に至って日向の国分寺に無拠因縁によって止りて住職いたし、三年目の正月廿三日に出火に逢い、それより七年が間難行苦行にて、伽藍建立成就して後、寛政九巳歳四月八日に国分寺出立す。それより当国に来る事、申の歳十月晦日に此所に来りて、当村寺の本尊五智如来を彫刻し奉り勧請するもの也。直に発念致し、明る正月の末に出立の節、当村より横手村迄、一列一帯に申合せ、願い来る事大望の願の儀、覚束無くは候へども、余り殊勝の儀に免じて、相談に及ぶ。何事も一切申合せ具足して取り掛り候節、兄弟共の山に草庵を結び、小屋道具等は皆兄弟の松山一と山切り荒し、之は第一の寄進也。愈々取り掛かるは寛政十三酉三月六日より取り掛り、段々出来する事、半の頃に至りて、脇村方、皆割々に、不落着の儀なり。皆離れて、残りの家数十八軒になり、成就する事も覚束なく存じ相談に及ぶ。其等は、当村十二軒は申すに及ばず南沢村五軒も、踏み込んでする筈に、固く申合候へども、其後又々不落着に相成、離れて後十三人となる。その節評議して固く申合せ十三人講中と極め、四国八十八所は日本廻国大願成就の供養の為に此処に八十番勧請す。又南沢村の施主は、寄進合力、或は人足等迄も万事心附けたる、至心の志に免じて八尊は三人の内仏として授くるもの也。両村締て八十八番也。縦へ末世に至るとも、両村

隔て無く信ずる可きもの也。又々当村の衆中も不落着儀に相見え、何事もそれ〳〵に相成、何事も忘じて支障の所を、覚束無く思い候へども、先は段々の儀を玆に示し置く事、之は懺悔の儀也。凡て一切の儀、神仏に仕へ神前に於ては神は非礼を受けじ。仏前に於ては色々取合せの不浄、凡夫は知らずと雖も、面々の身の上に掛る不浄なれば、現世に於ては一切出世も適はず、又は七難来ると雖も逃れ難し。現当共に忽然と障はりとなる故、是を聞き是を保ちて末世に至るとも、罪科不浄を払ひて、仏前に向って悉く懺悔して、家内安全を願ふ可し。又曰く夏の頃より、(又懺悔)使い水等迄も反故になり、又曰く新山を求め村方にてする事の定り方も、それ〳〵に元切ばかり棄て置き、之も此方にて人を入れ取り始末致しす。又本尊堂迄も成就の後も、掃除等も構はず、又曰く開眼の節も、一円世話もなく、又後の取片附くる事も更に構はず、此心にては一切覚束無くは候へども之迄の一切の善も悪も懺悔して、何事も勘忍、不足を堪えて互に睦しく、一切に心をつけ至心信心の志を起すに於ては、村講中も安全なる事を得て所も繁昌、福徳円満自在なる事、眼前也。縦へ末世迄も至るとも、言い伝へ、信心の志を起すべきもの也。

木喰五行信頼の件

歌に

○カウ中ノ　心もこゝに　丸ばたけ
　十三ぶつの　心なりけり。

○みな人の　心ごころを　丸ばたけ
　かど〳〵あれば　ころげさりけり

○みな人の　心のぐちは　いらぬもの
　ふじやうけかれと　おもへ人々
○みな人の心をまるく　まん丸に
　どこもかしこも　まるくまん丸
○みな人の　心ごころを　さんげせよ
　神も仏も　いさみまします
○みな人は　このよばかりを　たのしみて
　またくるはるは　なにをくふべき
○木喰の　かたみのふでの　おもかげを
　心にかけよ　このよのちのよ

四国堂木喰五行の一切一期の建立也。
享和二戌歳二月廿一日にこれを書く。
衆生の他力は堂上の板に記し置くもの也。
日本廻国八宗一見
　日州児湯郡府中国分村
勅願所
　五智山国分寺隠居事

天一自在法門　木喰

出生ハ当所ナリ五行菩薩（花押）

八十五歳

二　思想と信仰

柳宗悦氏の「木喰上人年譜」に「二十二才にて大山不動尊にて参籠し、子易町に於て濃き真言宗の大徳より道を説かれて仏門に帰す、これより七十年間の僧としての生活始まる」とあり、又、四国堂心願鏡の中に「当所を出ルコト十四歳ノ歳ニ、タコク江戸ヲモテニデテ、サマザマムリヤウノ、ホウコウヲハゲミ、タビ〳〵出世スル事、タビ〳〵アルトイエドモ、ウンキタラザレバロ人スル事ドドニオヨブ」とある如く、青雲の志を抱いて江戸表に出て立派に出世しやうとして、努力もし苦労も続けて来たが、事志と相違して思うようにはならなかった、即ち自分の力丈けではどうにもならなくなり、神仏の加護を得んものと相州大山石尊へ参籠中宿縁煎発して仏縁が結ばれた、そして僧となって上菩提を求めつゝ、困っている人々への救済の手を差延べ、神仏の大慈悲に縋って生涯を生きん、と覚悟されたに違いない、而してその時に上求下化の大願を打ち立てられたが、初めは明白なものではなかった様である。そして上人の修行が進むに従って徐々に具体的に明らかにされた、最初六大願を立て更に十大願を立て、十八大願をも立てられたことが明らかにされている。即ち「日本廻国八宗一見の行者、十八大願の内本願として仏を仏師国々因縁ある所にこれをほどこすみな日本千体の内なり。日本しまく〳〵修行すること、今年まで七十五年　心ごころの中に住す

帰命頂礼　法身阿字一念　仏法至心信　広説普遍　誓願事　懺悔衆生法門度　法界金剛諸仏同一体　三世浄妙自在

無家無我木喰明満仙人

文化五辰歳三月廿一日　コレヲカク　九十一歳

神通光明　木喰　明満仙人（花押）

と、上人の晩年の作、甲斐善光寺にある阿弥陀如来の画像の下に書かれた心願文であるが（この画幅は丈け二間、巾一間の大幅である）

十八願の一々の名目については記しておらず、現在の資料の中には発見することができない。

凡そ仏願には、上記の上求下化の総願をもとゝとして行人の意楽（ぎょう）によって別願が立てられる、即ち普賢の十大願、阿閦の二十願、弥陀の二十四願、三十六願、四十八願、文殊の十八願、師子香の四十願薬師の十二願及四十四願等を挙ぐることができるが、木喰上人も別願として十八願を立て修行に精進された。然し十大願については上人八十六才の時越後の古志郡に入った頃、享和三亥歳三月十日に書かれた「木喰うきよ風りんわさん」の巻末に附記されたものである。

第一願　天等大供養法門

第二願　日本廻国八宗一見修行

第三願　仏作願心十方カフガ

第四願　有情四百衆病見

第五願　一切衆生一夜説法

第六願　無別方便戒海水心

第七願　高ヤ常光明真言
第八願　常念仏因縁ノ所ニ
第九願　一切経衆生アンイノタメ
第十願　千タイ仏師因縁トチ

この十大願が普賢の十願に密接の影響を受けた如くに「木喰上人伝」には記されているが、普賢十願とは、一に敬礼諸仏　二に称讃如来　三に広修供養　四に懺悔業障　五に随喜功徳　六に請輪法輪　七に請仏住世　八に常随仏子九に恒順衆生　十に普皆回向　の十種で大部分は関係ない様で、上人十大願は独自の信仰の境地が生れたものと思考される。以下この十大願を中心として、上人の思想と信仰について考察を進めて見たいと思う。

1、第一願　天等大供養法門

「天」とは即ち第一義天である、又第一義浄天或は単に義天と云い真実最上の天の意味であって大涅槃に住する諸仏菩薩を云うのである。又、義天と名づくるのは「十住の菩薩は普く一切法空の義を解するが故に名づけて義天と称す」と、大涅槃経第十八に「我れ曾て聞く、第一義天あり、謂く諸仏菩薩は常に変易せず、常住を以ての故に不生、不老、不病、不死なりと、我れ衆生のために精勤して第一義天を求む、何を以ての故に、第一義天は能く衆生をして煩悩を除断せしむること猶ほ如意珠の如し、若し我れに信あり乃至慧あらば則ち能く是の第一義を得て、常に衆生のために広く分別して第一義天を説くべし」

「即ち大乗菩薩の念天の行は凡愚が四天王処等の六道の中の世天を念ずるに同じからざることを説けるものなり」

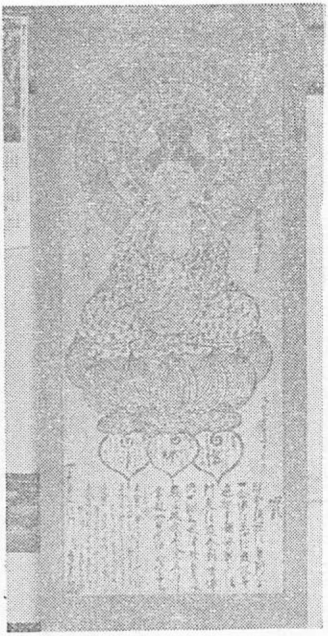
と、又、同経二十二に、「如来は天に非るも然も諸の衆生は亦復た仏を称して〃天中の天〃と為す」と説くが如く、天とは諸仏世尊を指すのである。

「等」とは複数であり無量の諸仏菩薩を指す意味であろう。即ち廻国順礼となって経を読み、真言を誦し、念仏を唱へて報恩感謝の行を修することが「大供養法門」と名づくる所以であろう。上人の歌に

○真言も南無阿弥陀仏も　ねんずれば
　人の知らざる　供養なりけり

とあるは、第一願の意を表はしているのではなかろうか。

更に又上人が文化三寅年八月四日に画かれた薬師如来の画像（丈一米六五糎、巾六五糎）が故郷丸畑の伊藤家に秘蔵されているが、その像の蓮華座下四海波の雲形中には次の様なことが記されている。



儒　静謐やしづめしづまるあめの下
　　日月星明国土安穏

仏　国々のおきて王法御制札
　　おそれぬ人はあやうかりけれ

神　天等の信との道をはずれずば
　　一も二もなしすぐにそく心

即ち、神、儒、仏平等に記されており。

「神」の字の下に「天等」の二字があり、その次に「信との道をはずれずば一も二もなくすぐにそく心」とあり、

支那上代の天の思想、日本古来の宗教思想にある通り、宇宙の絶対者を「天」と名づけ、天を最高の神として最も崇敬して有意的最高神として祀り、この天の道を通じて政治、道徳、宗教が発展した時代もあるのでこの絶対最高神に対する「信」の道を誤らなければ、そく心成仏疑なしと説かれたのである。即ち上人の信仰は神儒仏三教の基盤の上に立てられたものであり、諸仏諸神諸聖人に皈依することが福徳行であると云う思想である。故に日本国中の神社仏閣を順礼して仏菩薩、神明の木画像。千体彫刻を立願実行された所以である。

2、第二願　日本廻国八宗一見

上人は安永二年五十六才日本廻国の大願を発し、二月十八日相州伊勢原を出発して以来文化七年六月五日九十三才を以て入寂する迄、三十有七年間の廻国修行であった。上人はこのことを「四国堂心願鏡」の中に

「日本廻国修行せんと大願を起して発心する事四十五歳の年也、其節常陸の国木食観海上人の弟子となり、木食戒を承ぎ凡そ四十年来の修行也、凡そ日本国々山々嶽々島々の修行を心に掛けて日本粗々成就に至る」

と述べている。柳宗悦氏はその著「木喰上人」に、「家を出てより三界に家なきこと八十年、沙門の身となってより法に活きること七十二ケ年。戒を守り身を修むること殆と五十年、廻国せんと歩むこと三十有八年、踏みし里程上下凡そ五千里、刻みし仏体一千余体云云」

とある如く北は北海道、南は鹿児島まで順礼修行の旅を続けて生涯を終ったのである。

◎八宗一見

柳宗悦著「木喰上人伝」の中に、「上人は真言の僧ではあったが一宗に仏法を限ることを欲しなかった、彼は常に「八

宗一見」の句を用いていた。八宗とは、一に三論、二に成実、三に法相、四に倶舎、五に華厳、六に律、七に天台、八に真言の八宗である。だがこれは凡ての宗派を抱括する意味であって、もとより浄土、禅の諸門をも含むであろう。彼は自らを八宗僧師と呼び、彼の法門を「自在法門」と呼んだ」

と述べているが、これは東大寺凝然の八宗綱要の説を取ったものであるが、上人のそれは名目は八宗としてあるが真言、念仏が中心であり八宗の外に儒教、道教、神道、日蓮等が含まれ、所謂開会の立場から受止めた様である、「一見」と云う語はまことに意義深いものがあるようである。所謂「八宗見学」と云う言葉は古くからあるが「一見」と云うのは寡聞にして未だ聞かない、「一見」とは一切経教の優劣を論ぜず、比較検討の域を超越して経教の所説を信じ行ずることによって直ちに現安後善の二世安楽に繋がると確信していた様である。即ち上人の句に

○仏法に　こりかたまるは　いらぬこと
　みだめにきけば　うそのかたまり。

と。木喰上人の融通無礙の信仰を単的に表現したものと云へよう。

◎「八宗一見」と三種法華論の思想

伝教大師の三種法華論の所論も上人の「八宗一見」の思想によく酷似しておりその由来は三種法華の影響を受けて居るかの如くに思はれる程である即ち三種法華とは

伝教大師の守護国界章巻上に

「夫れ於一仏乗とは根本法華なり、分別説三とは隠密の法華経なり、唯一仏乗とは顕説の法華経なり、妙法の外に更に一句の経なく唯一乘の外に更に余乗等なし、機に随って千名あり、根に随って浅深あり、諸の有智者善く思念せ

よ、一代経教の優劣を執すること勿れ」

と述べている。又、良助の法華師臨遊風談第一、三種法華事に、論記に、曰く「根本法華とは華厳三七日の間思惟して未だ説かざる法華経なり、隠密法華とは阿含、方等、般若なり、世尊は隠密法華なれども名を替へて阿含、方等、般若と名けたまうなり、顕説法華とは第五時の妙法蓮華経なり、顕はして二乗三乗も一仏乗なりと説く開顕の法華なり、然らば則ち一代諸経は一偈一句として法華に非るはなし」と。

口訣に曰く、「三種法華経は、天台大師生生世世より中陰の旅に至るまで頸に懸けたまう一紙の秘法なり」と、即ち

◎竜樹―慧文―慧思―智顗―灌頂―智威―慧威―玄朗―湛然―┬道邃―┬最澄―円仁―┬円珍
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└行満―┘　　　　　　　└安然―良源―┬源信
　　　└覚運

と師資相承し、「己心中所行法門」として嫡々相承された秘法である。更に法華経文には「一切衆生皆令入仏道」と説いて人開会され、三乗各々当身において一仏乗に会入し仏果を証得したことが明記されている。

身延総門即ち「開会関」はこの三種法華の思想に基き、身延山に詣ずる者、神儒仏の信仰の如何を問はず、若信若謗、順逆善悪を簡ばず、共に寂光の境地に遊ばしめ、下種結縁と増信得益の大果を獲得せしむることが出来るのである。

故に身延山に祀る、迹仏、権仏、大小の神祇等悉く超八醍醐の妙法の功力により、本仏果海中に住して、詣者をして大益を得せしむることを得るのである。

3、第二願　仏作願心方十カフガ

「木喰上人」伝にはこの第三願に「仏心」と注釈しているが、私にはこの願の意味が明白に解らない、然し自分なりに理解すれば、

「仏の衆生の大慈悲の誓願を心とし国中を行脚し、悩める者を救済しよう」と云う意味ではないかと思はれる。

4、第四願　有情四百衆病見

人々の凡ゆる病苦を信仰の力によって治癒せんとの誓願である。

薬師如来は人々の治病を本願とされている。上人が寛政十三年八十四歳三月八日から十一月晦日まで満八ケ月を費して、故郷丸畑の四国堂を建立し、本尊の八十八体の仏像を彫刻したが、その中で薬師如来像が二十三体の多数にのぼり、生涯において一千余体の仏像を刻んでいるので、全体においては二百五十体以上の薬師如来像が刻まれていることは推測に難くない。

これから見ても上人が「治病」を本願としている以上薬師如来の加被力を祈念されたことは当然であろう。

丹波国船井郡畠中村清源寺の中興十三世仏海禅師が記された、十六羅漢由来記に上人の治病の状況を記して、

「往年文化三丙寅年の冬十月、図らずも木喰五行上人来入せり――時に加持を望む者来る時は則ち干板を打ちて行者を呼ぶ、出でゝ加持或は十念を授く、初め来る者は五、七人なり、また二三十人なり、恰も晨星の落々たるが如く秋葉の飄々たるが如し、中ごろ遠くより風に趨る者或は三百或は五百、謂ゆる雲の聚り星の現はるゝが如し、幾許若干の数実に勝げて謂ふべからず云云」と、上人の行くところ必ずその名声を伝へ聞いて治病を乞ふ者雲集せりと謂う。

その方法は経文を唱へ、患部に筆で墨を塗り乃至十念するのみにて、病悉く癒えたと云う。上人の歌に

「皆人の四百四病は　なにやらん
　みな身の心　とゞかざりけり」
と詠んで、四百四病のもとは皆人々が天尊の道を忘れて、私利私慾にのみあくせくしているためである。即ち
「真言を心にかくる皆人は
　くる世〳〵は福徳自在」
とよんで、信仰をすゝめて居る。
越後小栗山に残る伝説に
「昼間は上人にとっては殊の外多忙であった、彼は彼の信仰によって病魔を弱き者の身から放してやった。霊験は口から口へと伝はつて彼を慕ふて集る者は夥しい、彼の加持祈禱による奇蹟は目前に示現されて、賽銭が此堂に集って馬に幾駄か積まねばならぬ程であった」と伝へられている。
又、十六羅漢山来記の中にも「加持を修する時は則ち人其の集り来ること雲の如く屯し、星の如く到る、其数謂ひつ可からず」
又、小栗山の伝説に「夜が明ければ、また病める者の友であったと云ふ」と、
又、故郷丸畑の伝説に「病める者、傷つける者又は腫物のある者が近隣から集って、上人に加持を乞ふと、彼は祈禱の後、墨を一二点つけ返してやると皆癒えたと云はれている」と伝へている。又、上人の歌に
「木喰にみなだまされて　たもとから
　一文銭をばらりばらりと」

と詠んだ如く、病気を治して貰ったお礼として差出した金が持ちきれない程集まった様である、上人はそれを惜しげもなく困る人に与えて、無一文で又、順礼の旅に上ったのである。

凡そ加持祈禱によって人の病を治することは、行者の信力と法力と仏の護念力の三者が一体となって科学で究めることの出来ない、不思議な治病現象が現はれることは周知の事であるが、特に行者の信行の力が大きく作用するものである。

木喰上人は

「我れ誓願して五穀と塩味とを食せざること茲に五十年なり、且つ臥具を用いず、寒暑一に単衣、時変れども衣を重ぬることなし——神仏に一千像を彫刻し、及び加持を修して以て衆生の病苦を救はんと欲する己なりと」十六羅漢由来記に記するが如く、常陸の木食観海上人より、木食戒を受けてよりの修行は全く五十年の長きにわたり只管に仏と共に起臥しての徹底した修行であった、即ち

「木喰の心のうちを　たづぬれば
　われより外に　知る人もなし」

「おもしろや　ねてもおきてもなむあみだ
　仏法僧の浄土なりけり」

「一心をつくしきっての　後を見よ
　衆生と仏　わからざりけり」

と、この歌を見ても、如何に大悟徹底していたかゞ窺はれる、而もその身なりは、十六羅漢由来記には

「容貌を視るに顔色憔悴して鬚髪雪の如く、壊色の衣を着、錫を持って来り立つ、異形の物色謂ひつ可からず、実に僧に似て僧に非ず俗に似て俗に非ず、変化の人かと思い、狂者の惑ふかと疑う、先師見て問ふて曰く、〃子は何人ぞや〃行者曰く〃諾〃某は木喰五行菩薩なり」と、上人八十九才の時の事である。即ち文化三年徳川太平の世に、この世の人とは思へぬ程の風態をしての修行は、正しく変化生の菩薩にして常人とは思えない。

「木喰の姿かたちを　ながむれば

　さながら　稲のかゝしなりけり」

この徹底した修行と神秘的にまで研ぎすまされた心境とによって行う加持なれば、病人と相対した丈けでも上人の体から発する霊波によって、病気は立ちどころに快癒するのも道理である。

5、第五願　一切衆生一夜説法

化他の行を満足せしむるためにも当然行はれたものであり、患者の病を治し又、順礼の行く先々、その徳を慕って集る人々に対して、仏の徳を讃歎し、信じ行ずる者の利益を説き信仰をすゝめられたことであろう。

「木喰を　とふとい人と　たづねくる

　たづぬる人は　なほもとふとし」

即ち毎日宵の内は人々に法を説き、夜半丑満頃より彫刻に刀を振い夜の明くるのを知らなかったと伝へられている。

6、第六願　無別方便戒海水心

柳氏はその著「木喰上人」にこの第六願の意を「戒律」と注してあるが、私はこれが如何なる意味かこの願意の字句

の説明は出来ない、が、これを推測すれば「仏道の修行は別に意識して殊更に技巧を弄することなく、方便手だてを要せず、身を処するに（戒）海水の如き心を持つべきである、即ち海水は自ら意識せず自然の環境に従って流れ、風吹けば波立つ、この無為、無作、無心の自我の執着を棄てた心境で精進すべきである、との意味ではなかろうか、上人の句にも

「仏法はしるもしらぬも　南無阿弥陀
　仏法僧の風にまかせて」
「仏法にこりかたまるは　いらぬこと
　弥陀めにきけば　うそのかたまり」
「仏とも鬼とも蛇とも　別らねど
　なにゝなろうと　なむあみだ仏」
「われ足りず　心も足りず　身もたりず
　足りぬ足りぬも　利益なりけり」

7、第七願　高ヤ常光明真言

「木喰上人」には「真言」と注している。高ヤとは真言宗高野山金剛峰寺のことである。即ち弘法大師の伝へられた「真言」を常に唱へると云うことである。光明真言とは、密教の呪文「陀羅尼」の名であり、これは大日如来の真言であって「一切諸仏菩薩の総呪なり」と云はれている。即ち

「唵(おむ)　阿謨伽(あぼきゃ)　毘盧遮那(べーろしゃのー)　摩訶母捺羅(まかぼだら)　摩尼(まに)　鉢納摩(はんどま)　入縛羅(じんばら)　鉢羅韈多野(はらはりたーやー)　吽(うん)」
（帰命）（不空）（大日）（大）（印）（宝）（蓮華）（光明）（転成せよ）（金剛不壊の義を表はす）

で、不空大日如来の大印は宝蓮華光明を具し罪禍を転滅して菩提を証得せしむるの意である。

光明真言儀記には

「此は大毘盧遮那如来乃至浄土に生ぜしめん」とあり、光明真言を唱へることによって無量の功徳あり、とする真言宗の教義に基くものである。

上人はこれについて

「真言を心にかくる皆人は
くる世〳〵は　福徳自在」

と詠んでいる。

上人の懺悔経諸鏡の中に、光明真言を梵字にて記し、その次に

「夫レこの一字より、シャバ一切ノ事ハジマリテ　キメウノシャバセカイナリ　スナハチ光明遍照十方世界ナリ　ナヲ又八万四千の経々モ皆コノ一字ヨリ　イズルナリ　アルイハ　ヨミチナンゾスルトキワ　ナンヲノガレ　サメシカラズ　至信ニキメウシ奉ルベキモノナリ」

歌に、

「真言も　南無阿弥陀仏も念ずれば
人の知らざる　供養なりけり」

享和二戌歳二月廿一日コレヲカク
天一自在法門　八十五才
木喰五行菩薩　(花押)

とあり、常に真言を誦していたことが知られる。

8、第八願　常念仏因縁ノ所ニ

念仏とは一往は修行者が仏を念ずることであり、小乗に於ては念仏、念法、念僧等の三念が仏道修行の根帯として行はれたが、この場合は、所謂阿弥陀仏を念ずることである。即ち「常念仏」とは常に六字の名号を称へると云うことである。「因縁ある所に」とは念仏の信者に逢い、法を説き或は念仏の寺に詣でた時には常に念仏を唱へて弥陀の利益を蒙る。と云うことの様である。念仏については上人の歌にも、

「南無阿弥陀　ひもじくもなし年の暮
　またくる春も　喰ふ念仏」
「ながかれと　思う命を　たのしみに
　なむあむだぶを　ねてもおきても」

9、第九願　一切経衆生アンイノタメ

「木喰上人」伝には、「奉経」と注している。奉経とは如何なることか、各種の書物を見ても明白にならないが、恐らく上人の遺品の中に「奉納妙経、或は納経帖」等各一冊があり、順礼の途次寺々を訪れて、金子を奉納して受けた宝印、寺印等が押捺してある、日蓮宗で云う御首題帳の如きものであるが、奉経はこれとは少し意味が違う様であ

る。願文に、「一切衆生アンイノタメ」とあることから推測しても、各寺々を訪れて御宝前において、経文を読誦し、光明真言を誦し、念仏を唱へて法味を奉り、国土安穏、五穀豊饒を祈願したのではあるまいか、未だ詳しくこれを知ることを得ず今後の研究を期したいと思う。

10、第十願　千体仏因エントチ

上人の千体仏彫刻については、恐らく「賢劫千仏」の思想の影響を受けたと思はれる。即ち賢劫とは、現存する世界の発生から滅亡までの期間を成、住、壊、空の四劫（時間の義）に分つ中、住劫を指して「賢劫」と云う。此の期間に聖賢多く出るが故である。その仏名については、賢劫経、現在賢劫千仏名経、仏名経等に具さにその名を列記してある。

千仏出世の因縁については、維摩経に

「過去無央数劫不可称計の時に薬王あり、転輪聖王あり、太子善宿以下の千子と共に薬王仏を供養す。転輪聖王今の宝成如来、善宿は釈迦、その余の千子は賢劫の千仏なり云云」と述べ、その他大宝積経、千仏因縁経、観薬王薬上二菩薩経に、千仏出現に関する事が説かれている。又、大智度論三十八には

「是の一劫中に千仏興ることあり、乃至前劫尽き已りて廓然として都て空なり、後大水あり水底より千枚の七宝光明ある蓮華を誦出す、これ千仏の相なり乃至これによって千仏あることを知る云云」と、この思想を受けて亀茲、高昌を始めとして支那甘粛省敦煌等にては、大小多数の洞窟内の壁面には、千仏の像が画かれ、又、梁の前文帝の千仏造立、南斉禅林寺の浄秀尼の同織成像等の事実によって、千仏の像が造立されたことが知られる。

日本にては、日本書紀に、白雉三年に「漢山口直大口奉レ詔刻二千仏一」とあり、現存するものとしては法隆寺金堂内

の玉虫厨子の内壁にある錦鍱銅板のものが最古のものであらう。
その他同寺天平十九年資財帳（什物帳）金泥押出千仏像、大安寺資財帳三重千仏像、大和長谷寺には朱鳥元年銘の千体仏銅盤一面、唐招提寺盧遮那仏後背、浄瑠璃寺の阿弥陀如来（藤原期）、福地院の地蔵（鎌倉期）、鳥羽院の御願にて天承元年三月十三日の供養銘の得長寿院の三十三間堂の等身聖観音像、後白河法皇の御願にて長寛二年二月十七日供養された蓮華王院三十三間堂の一千一体の千手観音像、興福寺三重塔の壁面の千体仏画、その他興福寺千体聖観音像、新薬師寺の千体毘沙門、極楽寺千体弥陀、鎌倉円覚寺千体地蔵等の多数があり、現存の中には江戸時代の作が多く、身延山上の山丈六堂にも慶長年間、中正院日護上人の作千体釈迦如来像がある。
惟うに上人の千体仏彫刻の思想は、賢劫経、維摩経等の大乗諸経に発し、支那六朝時代を中心とし、又日本の白鳳、奈良、平安、藤原、鎌倉、江戸の各時代を通じて盛に行はれたその影響を受けているものであらう。而も上人が施されたところは、未だ曽って神仏に因縁薄き、農山漁村等の名もなき僻陬の地が圧倒的に多い。これを見ても如何に上人の民衆救済の方法が徹底して居ったかゞ首肯される。
通途の僧侶は人口の密集する都市に寺院を建立し、教会を設立して教を説く訳であるが、上人は自分の足によって廻国順礼し、山間僻地を遊行して因縁を結び、求めに応じて神仏の像を彫刻して施し、更に奇篤なことは神社仏閣に詣で神仏の像を彫刻しても、その本堂本殿に安置することをしなかった。必ずや自らの力によって二間四方或は二間に一間位の粗末な小堂を立てゝ、中に祀り開眼しおわり直ちにその足で次の因縁の地を求めて、順礼の旅に出たと云う。
従来歴史に残る印度、支那、日本の三国を通じての千体仏の造立は、奉詔或は願主のもとめに応じての製作であ

る、従って千体仏を一ケ所に祀られているものが殆んどであるが、上人のそれは北は北海道江差から、中国、四国、近畿はもとより本州を縦断し、九州鹿児島の南端にわたる広汎な地域に、而も名も知れぬ山峡の寒村に海辺の僻地に自刻の像を、而も自分の手によって粗末な茅堂を建て、三十五年間の永きに亘って彫り続けたことは、到底凡人の為し得るところではない。

恐らく三国にわたり古今を通じて、甲斐の木喰上人を措いてかゝる大偉業を達成した例は皆無であらう、而も七十、八十、九十才の老齢において、丈一米前後の像を早いときは一日で完成、平均三日弱で一仏体を無数に成就していることを見れば、如何に上人の技法がすぐれ、超人的な健康の保持者であったかゞ覗はれる。

又、彫刻に用いられた工具は「鑿、小刀、鉋と鋸」の四種類であったと伝えられている。

丹波竜泉寺に伝はる文書に

「文化四卯年二月二十五日、白髪長鬚の老人忽然として竜泉寺に来る、住僧問ふ、

〃老人何人ぞ〃

老人答て曰く

〃吾は甲州の明満仙人なり、当郡の畠中村清源寺に十六羅漢を彫刻し、今当寺に来る、聞く、当寺には十六羅漢あるも釈尊と両脇立ちを欠くと、吾、之を彫刻し奉納せん〃と、住僧悦で老人を請じ、大檀越岩崎氏に協議し、境内に在りし銀杏の老木を伐り、新たに堂を設けて彫像の準備をなす。老人毎食米飯に依らず境内の松葉を食し、昼間病者に接して療治に努め、夜間丑満つの頃より刀を執り彫像の事に従ふ。一ケ月にして釈迦の尊像、加葉、阿難の両脇立ちの御像、並に自像の四体成る。像成るや、漂然として袖を払って去る。其の後二年甲州より大工来り、現在の山門を

落慶し、十六羅漢並に上人彫刻の尊像の入仏供養を行いたり。」

とあり、又、越後の小栗山に残る伝説に

「上人が仏像を刻んだのは、いつも夜であって誰もそれを見ることは許されぬ、開眼の日までは不浄の眼に触れるべきものではないからである。乃至上人は室に籠って間断なく鑿の音が夜の空に冴え始める。人はいつ上人が眠るかを知らない。」と伝へ、

又「佐渡の梅津の九品堂から道を隔てゝ、ある小さな祠の内に、上人が刻みかけて半ばで止めたと云う不動尊が一軀祀られてある。これは或る日上人が、いつものように室を閉じて不動尊を刻んでいる時、ふと或る女が、戸を開いて中を覗いたので、常に不浄を避けて刀を執った上人は、穢れたからこれは仏にするわけには行かないと云って、中途でやめてしまった」と伝えている。

二、帯金金龍寺の日蓮聖人彫像

金龍寺は身延町帯金にあり。こゝに木喰上人彫刻の日蓮聖人像が所蔵されている。

上人は寛政十二年九月に身延に入られた。このことは「南無阿弥陀仏国々御宿帳（安永九子年五月十四日より寛政十二年九月廿五日までの日記帳）に次の如く記されている。

「一、寛政十二年九月　甲斐

一、十一日マンザワ　チャャ　三十ゴケ

一、十二、十三　ミノブ下町　重右衛門

一、十四日仲（町？）ジュズヤ　三十六文　重太郎

一、九月十五日よりオビカネ　浄仙院
一、十五日より
一、同十月廿五日立つ　　同国川内　丸畑　丸六（丸六は上人生家伊藤家の当主であろう）
一、廿五日より」

右の日記帳（宿帳）によって、九月十二、十三、十四日は身延へ宿をとったことが明らかであり、又「奉経帳」の最後の頁は身延山の寺印で終っている。

十四日身延を出立、十五日帯金浄仙院。

身延から浄仙院へ行く途中金龍寺が在る。こゝに立寄って、日蓮聖人像を彫刻されたものと推測される。

◎像の大きさ、

丈二一、五糎台座の高さ六、五糎

上人の作の中では比較的小さいものである。

◎像の背部には、

千体之内
聖朝安穏　増宝寿　正作木喰五行菩薩
日蓮大僧師
天下安楽　興正法　八十四歳（花押）
寛政十二庚申歳正月十二日成就
五十才　日得

（丸畑山神堂、山神像）

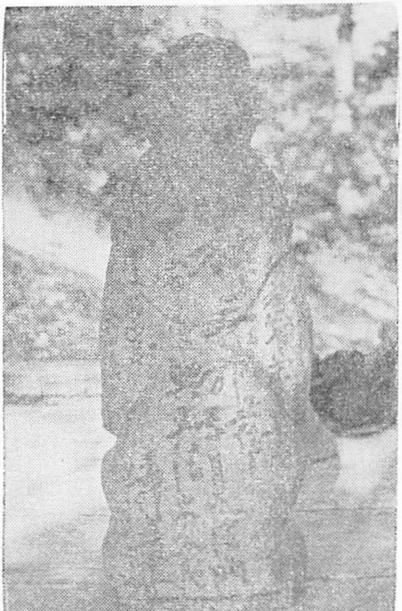
と記してあり、木喰上人の法華信仰については、平沢村人に与えられた書に、「奉納大乗妙経願以此功徳普及於一切我等与衆生皆倶成仏道」の文あることによって、法華経を尊崇されたことが解る。故に金竜寺の日蓮聖人を彫刻し「日蓮大僧師」と尊称して、像の背面に記入、自署した理由も覗はれる。

尚、台座の裏には

> 奉読誦 妙経三十部 陀羅尼
> 南無日蓮大菩薩
> 開仏知見
> 享和元辛酉十二月三日より二年正月三日迄
> 寒中修行

と記してある。

（山神背面、上人自筆）



寛政十二年の正月には、遠州奥山村狩宿に留錫し、十王堂建立、十王尊奪衣婆の彫刻に着手していた時と思はれ、而も寛政十二年は、木喰八十三才である筈なのに「八十四歳」と記してあることは、矛盾を感ずるが、これについては今後の研討を要するものがあるが、兎に角、金竜寺に、木喰正作の日蓮聖人像が現存することは、貴重な発見とも思はれる。而して台座の裏に右の文字がある通り、当時金竜寺住職日得なる者が、この日蓮大僧師像に対して、三十一日間の寒修行をなし、その間に法華経三十部並に陀羅尼を読誦して、開眼供養をなしていることも特筆すべきことである。

而して浄仙院に留まること四十五日間、今日一体の上人正作の薬師如来立像あり。

こゝにおいて上人の長い遍路旅は一段落を告げた。廻国巡礼の大願業を起して以来二十有八年、「日本廻国修行せんと大願を起して、およそ日本国々山々嶽々島々の修行を心に掛けて、日本粗々成就に至る」と記している。

三、上人彫刻像の種類

上人が本願として刻まれ、日本国中因縁あるところに施された。千体仏の種類であるが、「木喰上人」によれば釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来、阿閦如来、宝生如来、薬師如来、弥勒菩薩、普賢菩薩、文殊菩薩、地蔵菩薩、子安地蔵、虚空蔵菩薩、聖観世音、十一面観世音、千手観音、馬頭観音、子安観音、準胝観音、如意輪観音、子安如意輪、白衣観音、廿三夜勢至、吉祥天女、多聞天、不動尊、炎魔王、十王尊、葬頭河婆、十六羅漢、二王尊、十二神将、日天月天、随身尊、神変菩薩、金比羅権現、稲荷大明神、秋葉大権現、天満宮、西宮大神宮、山神、大黒天、聖徳太子、行基菩薩、弘法大師、興教大師、道元禅師、日蓮大僧師、自身像、その他狛犬、唐獅子等と記してあり、最も多く彫ったのが、観音と薬師如来像であろう。而してこれ等の仏菩薩の種子を皆知り、印契を知り、本誓を知り、各々その特色を熟知して彫刻されたことは、如何に仏像の彫刻に対して該博な智識と、周到な用意を以て臨まれたかゞ窺はれる。

然しそうした仏像の研究もさることながら、三昧の境地に入っての彫刻は「入我我入」の悟界の境地より、実際に仏我一体となり、感応道交して、無我の心境の内に忽ちに完成したものであれば、むしろ仏自体が、木喰の手を借りて自らの姿を刻んだものと見ることの方が至当かも知れない。

故に上人の彫刻した仏像は、古来の伝統的羈絆を脱して、有史以来例を見ない独創的刀法により、忽ちにして次々と完成されている。而もその影像の一つ一つが、微笑をたゝえ何とも云へない近親感を持たせる様な不可思議な表現であり、見るものをして、心の奥に秘められた法悦の扉を開いて、腹の底からその微笑に応えねば居られないような、苦楽を超越した心境に引入れられ、居ながらにして仏界に遊ぶが如き感を受ける。忿怒の姿を表現した不動明王の像、或は二王尊像にしても、怒りの面相の中に、何とも云い知れない慈愛の心が感じとられる。

鬼面忿怒の中にも、仏菩薩の隠された大慈悲心が、仏像の中から暖い血のつながりとなって伝はって来る。私も可成り仏像は拝んだが、木喰のそれ程近親感を以て心あたゝまるのを見たことがない。この意味に於ても木喰彫は彫刻史上に再研討、再確認されねばならないことゝ思はれる。

四、上人法名の変遷について

◎「三界無庵無仏」木喰行道

宝暦十二年、四十五歳、常陸国羅漢寺木食観海上人より木食戒を受け、名を行道と改めてより、寛政五年七十六歳日向国分寺再建完成までの二十一年間。

◎「天一自在法門」木喰五行菩薩

寛政五年国分寺再建後より、文化四年九十歳までの十五年間

◎「神通光明」木喰明満仙人

文化三年十二月十日、八十九歳丹波清源寺にて弥陀三尊より夢告によって授けられたる法号で、文化七年六月五

日九十三歳にて甲州上の原に入寂するまでの五年間。

木喰上人の法名は左の如く三回の変遷を見ることが出来る。

1、「三界無庵無仏」木喰行道

この名を使用した時期は、四十五才、木食観海より木食戒を受け僧として本格的な仏道修行に入りて各寺々を住職いたし、更に安永二年五十六才日本廻国の大願を起し、二月十八日相模国伊勢原を出立、武蔵、上野、相模、伊豆、上総、下総、常陸、磐城、岩代、羽前、羽後、陸前、陸中、陸奥を経て北海道松前庄に入り、再び返して信州より越後に入り、佐渡に渡り、留ること四年、六十八才佐渡を立ち、越後を下り信州に入り、上州、武州を経て甲州の故郷丸畑に入り、天明五年六十八才九月再び丸畑を立って、中国、四国、九州に錫を進め、ついに日向国分寺に留ること三年にして寛政三年火災に遭い、復興の大願を起して寛政五年完成に至るまでの二十一年間であり、文字通りの三界無庵無仏の日本廻国行道の生活であった。

2、「天一自在法門」木食五行菩薩

上人は当時の有様を述懐して記して曰く

「オヨソ日本国々山々タケ〳〵島々ノ修行ヲ心ニカケ日本アラ〳〵成就ニ至ル、ソノ節九州修行ノ節ニイタッテ、日向ノ国分寺ニ、ヨンドコロナキ　インネンニヨッテ　トドマリテ　住シヨクイタシ　三年目ノ正月廿三日ニシュ火ニアイ、ソレヨリ七年間　ナンギョウクギョウニテ、ガランコンリュウ　成就シテノチ　寛政九巳歳四月八日ニ国分寺出立ス

勅願所　日州児湯郡府中国分村

五智山国分寺隠居事
天一自在法門　木喰五行菩薩（花押）

と、即ち天明八年四月廿四日、七十一才、ヨンドコロナキ因縁によって、勅願寺の住職となり、三年目の寛政三年正月二十三日に国分寺は失火のため炎上してしまった。

これより上人は再建の大願を起し、難行苦行して、寛政五年七十六才の年、夏六月、伽藍、本尊、自刻像等を完成した。

此時より「行道」の名を「五行菩薩」と改め、且つ「天一自在法門」と称した。

国分寺に上人が刻まれた本尊は、五智如来、一丈八尺余の大像五軀である。その時の奉納額の裏には

「南無大師遍照金剛
寛政ミスノト丑六月六日コレヲカク
日本廻国　三界無庵　木喰行道（花押）
永々国分寺本尊ナリ
住持　行道事
五行大菩薩」

と、記されている。

五行とは即ち菩薩が修行するところの五種の行法であって、

涅槃経第十一聖行品には

「菩薩摩訶薩は当に是の大涅槃経に於て、専心に五種の行を思惟すべし、何等をか五と為す、一に聖行、二に梵行三に天行、四には嬰児行、五には病行なり」

と説いている。即ち戒定慧に依って修行する所の菩薩行なるが故に聖行と云い、二に梵とは浄の意であって、菩薩が空有の二辺に於て愛著の染なきを名づけて浄となす。此の浄心を以て、慈悲を運びて衆生に楽を与へ、其の苦を抜くが故に梵行と云い、三に天とは即ち第一義天の意にして、菩薩は天然の理に由りて妙行を成ずるが故に、天行と云い、四に嬰児とは人天小乗に喩ふ、即ち菩薩は慈悲の心を以て人天、声聞、縁覚の小善の行に示同するが故に嬰児行と云い、五に菩薩は平等心を以て無縁の大悲を運び、衆生に同じて煩悩あり、病苦あるを示現するが故に病行と名付くるのである。又、上人はこれを歌に詠んで

「つゝしみは　五行の道の極いかな
　　ならべて見れば　五かひなりけり」

と述べ、

五行とは、又、大乗起信論に

「修行に五門あり、能く此の信を成ず。云何五となす。一には施門、二には戒門、三には忍門　四には進門　五には止観門なり」と述べており、即ち「財と無畏と法とを施すを施門と云ひ、三聚浄戒を施すを戒門と云ひ、違順の境に於て安忍して喜怒その心を動ぜざるを忍門と云ひ、勇猛精進にして自利利他し、諸の障碍のために悩乱せられざるを進門と云ひ、一切境界の相を止め、因縁生滅の相を観じて、奢摩他及び毘婆遮那に随順するを、止観と云ひ、止と観とは漸々に修習して相捨離せず、雙べ現前するが故に合して一となす」と、円覚経大疏鈔、起信論筆削記、金裂網

疏、全本疏聴集記等に説明を加えている。

而してこの二種の五行は、涅槃経に「専心に五種の行を思惟すべし」とあり、即ち菩薩修行の心構えであり、この心地に住して行法を修すべしとの意であり、この二種の「五行」は菩薩行の理論と実践との二門を示したものと解される。

又、「ならべて見れば五かひなり」の五戒とは、小乗においては増一阿含には「不殺、不盗、不淫、不妄語、不飲酒当に形寿を尽すまで而も之を修行すべし」

と云ひ、大乗に於ては無量寿経巻下に「菩薩の受持すべき五種の制戒として〃一に不奪生命、二に不与取、三に虚妄語、四に欲邪行、五に邪見なり」と、

大日経疏第十八にこれを釈して「声聞経の如き、俗人に五戒を持たしむる所以は、身口を防護して、見諦に入らしめんが為の故なり、今此の中も亦爾り、此の五句の戒を以て方便となして、而も之を防護し、真言の行を成じて而も見諦を得せしむ」

とある如く、大小乗を問はず仏道修行者はこの五戒を持して行を進め、以て見諦即ち真理を証得することが出来ると説いている。

故に五戒を持つことは、菩薩所修の五行を成ずる前方便であり、五戒受持の当体に五行を成満することが出来ると説き、五行即五戒と相即不離の妙理を詠んだものであろう。

上人の歌の「つゝしみは」とは、十七条憲法に「承詔必謹」と云う句があるが、つゝしみ」はこの「謹」に通ずるものがあり、即ち仏の教へに対して疑を起さず、澄浄な心を以て三宝に帰依すべきである。仍て「つつしみ」は「信」に

に通ずる。
大智度論第一に「仏法の大海は信を以て能入となし、智を能度と為す乃至若し人心中に信清浄なるものあらば、是の人は能く仏法に入る。若し信なければ、是の人は仏法に入ること能はず」と、又
華厳経第六賢首菩薩品に「信は道の元、功徳の母と為す」と云う如く、上人は「信」と「五行」と「五戒」の関係を「修行の要諦」として、一首の歌を通して心にくいまでに、率直簡明に表現している。

「天一自在法門」

上人は彫刻した仏像の背に必ず、中心に仏名を記し、更に左右両脇に「聖朝安穏増宝寿、天下安楽興正法」と記し、右下脇に「日本千体の内」左下脇に成就年月日を記し、中央の下方は必ず「天一自在法門、木喰五行菩薩（花押）」と云うかたちをとって居た。
天一自在法門とは、前日の如く、第一義天に対して自在である。即ち日夜仏と相通じ、仏と共に起居して、仏の霊示を受けながら「作仏」と「病見」の二大願の成就に精進していると云う意味であろう。

3、「神通光明　木喰　明満仙人」

文化三年八十九才より、文化七年六月五日入寂に至るまでの四年間。
丹波清源寺、十六羅漢由来記に云く
「……同年十二月十日伐那婆斯尊者を彫刻し奉る。此夜上人御夢を蒙り上り、歓喜の余り明旦九日祝斎を設け、披露して曰く〃昨夜鶏鳴未だ暁に至らず、則東方灼然として紫雲旋り降る。忽起して瞻仰すれば即ち中央に弥陀三尊来迎せり、高声に余に告て言く〃汝が願望莫大なり、依て六百歳の延寿を与ふべし。其の名を改めて、神通光明、明満

仙人と号せよ』余忽然覚悟す云云〃と、

又、同国龍泉寺からも、上人の留錫中の彫像の縁起書が発見された。その中に、

「……吾は甲州の明満仙人なり云云」と自ら明満と名のっている。

惟うに上人の法名の変遷に就て、推察するに、これは直ちに上人の廻国巡礼の修行を通じて、解脱の境地に進んで行く行位の増進と断証の過程とが想像されて、まことに意義深いものがある。

即ち、最初の「行道」の名は、日本廻国修行の第一歩であり、従って当時「三界無庵無仏」と肩書きされたことも、その心境と修行の浅深の度合を推し測る、尺度ともなると思はれる。

行道とは道を行ずる。仏道修行者の意味であり、三界無庵無仏とは、この娑婆の世に定められた家もなく、仏もない即ち只管に仏を求めて一途に修行に励むばかりであると云う意味であろう。

それから二十年、三界無庵、廻国行道の苦修練行の功によって、仏を得、悟りの一分を覗くことが出来た、所謂見諦の境に入ったわけである。これによって、

天一自在法門木喰五行菩薩と改名した。無尽の法門を体得して自在を得、大乗菩薩が聖行等の五行の法を専心に思惟し、六波羅密の行、即ち五行を修し、五戒を堅持して得た悟りの心境を現はした法名である。

「神通光明木喰明満仙人」とは、前記の十六羅漢記によれば、夢告によって弥陀三尊より与えられた名である。

「神通」とは

仏菩薩の定慧力によって示現する無碍自在の妙用を云うのである。即ち

大薩遮尼乾子所説経第七に「沙門瞿曇の神通行に六種あり、一に天眼通、二に天耳通　三に他心通　四に宿命通　五

に如意通　六に漏尽通なり。」

大智度論第二十八に「菩薩は五欲を離れて清涼を得、慈悲あるが故に衆生のために神通を取り、諸の希有の奇特の事を現じて衆生の心をして清浄ならしむ、何を以ての故に、若し希有の事なければ、多くの衆生をして得度せしむること能はざればなり、乃至常に軽空の相を修すれば是の時便ち能く飛ぶ。二には亦能く諸物を変じ、地をして水となし、水をして地となし、風を火となし、金をして瓦礫となし、瓦礫をして金となし云云」、三には諸賢聖の神通は六塵の中に於て、意に従って自在なり、好を見て能く厭想を生じ、醜を見て能く楽想を生じ、亦能く好醜の想を離れて捨心を行ず、是を三種の神通と名く、この自在神通は唯仏のみ具す」

とあるに見て、上人の神通は第三の神通を得たものか。

「光明」とは一に光と明との併称で、倶舎論第一に「日焔を光と名け、月星、火薬、宝珠、電等の諸焔を明と名く」と。

二に光即明の意で、仏菩薩等の身より発する光焔を云う。法華経第一に「如来は眉間白毫相の光を放って東方万八千の仏土を照す」とはこの事である。又、瑜伽師地論第十一に「光明に三種あり、一に暗を治する光明　日、月、星、火、珠等）二に法光明、三に依身の光明。

法光明とは、其の所受、所思、所触に随って諸法を観察し、或は復た随念仏等を修習す。依身の光明とは諸の有情の自然の身光なり」と上人の光明は、法光明の意にして、所謂上人の神通光明とは、自利の行において空、仮、中の三観の智を円満具足し、化他の行に於ては能く衆生の性欲不同を観察し、臨機応変、応病与薬の妙術に自在なり、と云ふ意味において弥陀如来より夢告によりて、授かりたる名なりと思考される。

「明満仙人」とは、自他の二行を明かに満足し、その心境たるや恰も苦の娑婆にありて苦を感ぜず。超然として大慈悲心に住し化他の行を施し居るは、恰も仙境に遊ぶの感あるによって、授けられたものであろう。故に十六羅漢記には「実に僧に似て僧に非ず、俗に似て俗に非ず、変化の人かと思ひ、狂者の惑ふかと疑う」と、清源寺十三世仏海禅師は述べている。

五、上人の木食行について

宝暦十二年、四十五才にして常陸国羅漢寺住職、木食観海上人より、木食戒を受け、爾来「五穀と塩味を食せざること、茲に五十年なり、且つ臥具を用いず、寒暑に単衣、時変れども衣を重ぬることなし」と述べて居るが、上人は常食として、蕎麦と松葉をたべていた様である。即ち丹波竜泉寺で発見された上人の歌に

「そばきりゃ　いかなる人のながれぞや
　　より来る人の九ぜん十ぜん」

「木喰の　そばのこどもにだまされて
　　まだもうきよに　うろたえている」

九ぜん十ぜんは「膳と善」をかけたものであり、「こどもにだまされて」は「蕎麦の粉」どもと「側の子供」をかけた歌であると云はれ、上人が子供を好きであったことも、地域に残る口碑である、と云はれている。

又、竜泉寺文書には

「老人毎食米飯に依らず、境内の松葉を食し云云」と記してある。

因に蕎麦粉の成分を見ると、主成分はデンプンであるが、タンパク質、ビタミンB_1 B_2、ニコチン酸も多く、栄

養価が高い。ソバのデンプンは火熱を加えなくても消化し易く、ソバカキにしただけでも食べられる。またソバの蛋白質は水に溶け易いので、汁は特有の風味があり、ソバ湯と云って飲用される。近年ソバにルチンを含むことが解って、高血圧症の食事に適すると云はれていると、文献に記してあり、又、ルチンは「毛細血管のもろさを治し、その浸透性を減弱させる作用がある。特に放射線による毛細管性出血の治療予防、殊に脳出血の予防のため、高血圧患者の常用薬として使用されるに至り、連用による副作用が全くない」と記されておる。

マツバは一般の食用ではないが、昔から松葉から造る「マツバ酒」は強壮剤として、一部の人々に愛用されている。要するに上人が、水搔きのソバ粉を常食とされていたことは、ソバ粉それ自体に人体に必要な完全に近い栄養素が含まれ、又更に老年期の者には、高血圧の予防として最適であり、又蛔虫駆除にも効果がある、と云われており、更に強壮剤としての松葉を常食としていたことは、期せずして健康長寿の法に叶っていたと云われよう。上人自身の体も勿論生来頑健で病気を知らぬ程であった様だが、又以って木食行そのものが、九十三才の長寿を保った秘訣でもあった様にも思われる。

㈢ 現代栄養学への提言

現代の栄養学においては、「身体の成長を促し、体力を保持してゆくために、炭水化物、脂肪、タンパク質、ミネラル、ビタミン等が必要であり、前の三を三大栄養素と云い、エネルギー源となるので熱量素とも云はれている。この内、体の主要成分はタンパク質であり、無機質はこれ等と違って、体内で燃えると云うことはないが、燐、カルシウムの様に骨や歯の成分となるもの、或は赤血球の血色素の成分となる鉄、甲状腺ホルモン成分のヨードの様に、量は僅かであるが不可欠のものもある。ビタミンは複雑な有機化合物で、食物中に僅か存在する丈けであるが、これが

欠亡すると他の主要素が充分にあっても、重大な障害が起る。ビタミンは機械の潤滑油の如きものである。」として人間の体を物質一辺倒で割り切ろうとしている。

斯うした考へ方に基く現代の栄養学が、果して人間の身心の発達に万全の効用を与えるであろうか。

日本食養学研究会長　丹沢義助氏は、健康長寿の秘訣として、菜食主義を提唱して、往昔の高僧、智識が長寿を保ったのは、菜食主義の結果であり、更に常に心の安定をはかることが大切であると述べ、又、身心を適当に働かせること、若し働かさなければ退化して行くと云っている。

今の時代は薬学が発達し、栄養剤、ビタミン剤、強壮剤等が市販のものでも、千数百種類にも達して居り、その服用人口は夥しい数にのぼっているが、病人は減らないのみか、逆に増加の傾向を辿っている。

又、勤め人が停年退職すれば、急に病気を起し、急激に老化現象が起る、と云うことも屢々見聞する。又、身に余る様な大きな精神的苦痛が続けば体は衰弱し、髪の毛は抜け或は白毛がふえて、めっきり老けて行くとも云はれており、精神が肉体に及ぼす影響は甚大なものがある訳である。

又、人間は水丈け呑んでいても、二週間や三週間は活きており、山で遭難したものが、食糧がなくて死ぬ者もあるが、雪をたべて生命を繋いで助かったと云うことも聞いている。

又、北極圏のエスキモーはアザラシや鯨の生肉のみを常食としており、而も栄養正常であり、体躯は頑健である。

又、蒙古人も常食は羊肉であるが、栄養は正常である。

右の事実から見ても現代栄養学の示す、栄養素の配分の理論も絶対的に信頼する訳には行かない。今の栄養学の理論以外に、不可思議な創造力が、人間の体の中に存在する事も事実であり、又、人間の健康には精神が大きく作用す

ることも見逃してはならない。寧ろ精神に肉体は左右されると見ることが妥当であろう。
惟うに、人間の成長期に於ては、脂肪、蛋白、灰分を多量に摂取することは必要であり、壮年期を過ぎて、老化が現はれる年令には菜食を中心とした食餌が必要の様である。
今の木喰上人も、粗衣粗食によって九十三才の長寿を全うしたことは、信仰の境地に安住し、日々これ仏と共に在りとの歓喜の心に満ち満ちていたために摂取した食物が、すべて不可思議の精神力により百%の栄養源となったためであると思はれる。

四　おわりに

以上木喰上人の十大願を中心として、思想信仰について述べた訳であるが、勿論上人の思想信仰の全貌を尽し得たものではない。前述の通り、今夏、文化財研究委員の方々と、丸畑の上人の生家伊藤家を訪れて、短時間に資料を拝見したに過ぎない、記述中において不詳な箇所も可成り有り、再度調査研究すべきであったが、上人の生家が余りにも僻遠の山上の部落であるために、訪問の機会を得ず、旁々原稿の〆切期間切迫し、矢をつぐ催促の内に怱々にまとめたものである。
然し僅かな手元の資料を元として、記述している内に益々上人の偉大さに感激し日本の誇る、特異な宗教家として、又、彫刻家として、もっともっと人々に理解して戴かねばならないことを犇々と感じた。特に物質至上主義の現代思潮の中に於て、人間の活き方を再検討すると云う意味にても、崇高なまでの上人の全生涯の業績を紹介し、現在及将来に活きる人達の、真の幸福を齎す一つの鍵として、上人を鑚仰すべきであることを痛感し、機会を得て更に研究を深め、別な角度から上人を見究め紹介したいことを念願してやまない。

甲斐木喰上人年譜

享保三戌　（西紀千七百十八年）。生地の甲斐国西八代郡古関村丸畑。姓は伊藤。父の名は六兵衛。二男として生る。幼名不詳。

享保十六亥　十四才　故郷を出奔し江戸に走る。之より流浪の日。

元文初年　二十才の頃　役を得て偶々故郷を検分す。

元文四未　二十二才　相州大山不動尊へ参籠し。予易町に於て真言宗の大徳より道を説かれ仏門に皈す。七十年間の僧としての生活この時に始まる。

寛延、宝暦年間　凡そ三十才より四十才前後「修行の後、所々の寺々を住職遍歴す。」相州伊勢原を中心として関東に在り、修行の傍ら悉曇を学ぶ。

宝暦十二　四十五才　常陸国羅漢寺木食観海上人より木食戒を受く、終生この戒を守り行持乱れざる事五十年。この年名を「行道」と改め、三界無庵無仏と称す。

宝暦十三未　四十六才　父六兵衛二月より七月迄西国、四国の遍路に出づ。

明和七寅　五十三才　父六兵衛故郷に歿す。

安永二巳　五十六才　日本廻国の大願を発し、二月十八日相州伊勢原を出立す。武州、上州、豆州を廻り再び相州に入る。この年より満願に至るまで廻国する事二十七年間。

安永三午　五十七才　武州、総州、常州、野州に在り。

安永四未　五十八才　野州に長らく留まり再び総州、常州を廻る。足利の鑁阿寺にて二十日間参籠。この年四月母故郷にて歿す。

安永五申　五十九才　常州の下妻、黒子等にて百日参籠、更に奥州、羽州に入る。

安永六酉　六十才　奥州平にて百日参籠、江戸を指し甲州に入り八月故郷に皈る。再び北上十一月奥州に戻る。弟子白道従ふ、白道も甲州の人。

安永七戌　六十一才　相馬領を過ぎ南部に上る。海を渡って松前在に入りしは六月中旬、この年より江差に留ること二ケ年。遺作二体のこる。

安永九子　六十三才　五月十四日松前在江差を立つ。奥羽、陸中、陸前、磐城、岩代を経て九月下旬下野下都賀郡菊沢村栃窪に

留まる。居ること凡そ五ケ月、一堂を立て、本尊薬師、二脇士、十二神将を刻む。

安永十丑（天明元）六十四才　二月廿一日栃窪を立つ、江戸を過ぎ上州を経て信州に入り越後に達す。閏五月廿三日佐渡小木に上陸す。これより佐渡に留まること四ケ年。その間各所を遍歴、仏像を刻み書軸を遺す。

天明二寅　六十五才　佐渡檀特山御堂建立、地蔵尊のこる、歌集「集堂帳」起草。

天明四辰　六十七才　梅津村に在り、吉井村秋津地蔵堂建立。

天明五巳　六十八才　梅津村平沢に九品堂建立、本尊九品仏自刻像等を刻む。五月十五日佐渡水津を立つ、弟子丹海堂を守る。越後を下り信州に入り上州、武州を経て甲斐に戻る、故郷丸畑に入りしは九月中旬、十月より甲府九ケ寺に五十日参籠。

天明六午　六十九才　甲州、信州各地に作をのこし伊那郡に進み、濃州、尾州より飛州に入る。越中、能登、加賀、越前を経て江州に入る。鋳物師に遺作存す。続いて伊賀、伊勢、志摩、紀伊を経、中津川にて年宿。

天明七未　七十才　西国諸番に詣で泉州、河州、丹波、京を経て再び江州、続いて大和の諸大寺に詣で、摂津、播摩、美作、備前、備中より四国遍路に進む、讃岐は五月中旬、予州、土州、阿州と廻る。十月初旬は淡路島。讃州鬼無村に年宿遺作のこる。

天明八申　七十一才　再び予州を経て海を渡り豊後国佐賀関に上る。四月廿日日向国分寺に詣づ、求められてこの勅願寺の住職となる。これより在住十ケ年。

寛政三亥　七十四才　正月廿三日国分寺炎上す。上人再建の大願発す。

寛政四子　七十五才　国分寺本尊五智如来の彫刻に着手、各一丈八尺の彫像也。九月阿蘇坂梨に在り。

寛政五丑　七十六才　夏六月国分寺伽藍、本尊、自刻像全く成る。「行道」を「五行菩薩」と改め、「天一自在法門」と称す。

寛政七卯　七十八才　四月日州を発し隅州、薩州を経て熊本に至り長崎に入る。時に十月。

寛政八辰　七十九才　正月青表紙「歌集」成る。長崎を出て筑前、筑後を廻り年末日向佐土原に入る。

寛政九巳　八十才　佐土原金柏寺に釈尊大像を刻む、三月日州国分寺に帰る。四月八日国分寺を去り再び一遍路の身となる。それより後署名するに際し屡々「勅願所日州国分寺隠居事」と記す。豊後、豊前に進み六月廿四日遂に九州を離れ、長門国に留る。この頃より「千体仏」彫刻の心願を仏体裏に記す。美弥郡秋吉村広谷に毘沙門堂建立、本尊等彫刻。萩に留り年末福井村願行寺に入る。この間各地に仏体を刻む。

寛政十午　八十一才

願行寺に立木薬師を刻むや紫福村信盛寺に入り大師像等作る。かくして友信、江崎等を経て三月末石州に入る。留まりしは三隅村正法寺。出雲、伯耆、因幡、但馬、丹後、若狭踵を廻らし、七月再び伯耆に入ってこの国に幾体かの仏像を遺す。かくて美作、備前、備中、備後、安芸等山陽の国々、周防に入って山口宮市等に留る、千体仏残る。

寛政十一未　八十二才

中ノ関に月余を送り三田尻より舟を出す。再度の四国遍路始まる。三津浜に上り順次に札を納め予州、讃州、阿州、土州、再び三津浜より舟を出し瀬戸内海を舟行す。大阪に着きしは十月二日山城、近江、伊勢、尾張、三河。かくて遠州奥山村に至り、狩宿に杖を留む。

寛政十二申　八十三才

狩宿に十王堂建立、十王尊奪衣婆を納む、三月初旬開眼供養。中旬奥山方広寺。閏四月堀谷村再び十王尊刻、五月森町、同月歌集「心願」成る。六月駿州岡部。或は福昌寺或は神入寺等へ多くの作造る。次に手越村泉秀寺、九月興津、中旬身延。甲州西八代郡帯金に留ることを四十五日、薬師堂建立、本尊薬師如来像彫刻。こゝに日本廻国の大業遂に満願。十月晦日故郷丸畑に帰る。年末丸畑永寿庵本尊五智如来刻。

寛政十三（享和元）　八十四才

正月釜額長沢寺本尊阿弥陀如来作。二月大願を発し、丸畑に四国堂の建立及び八十八体仏の彫像を志す。刀を執りしは三月八日、納めしは十一月晦日、大願成就。十三人講中出で上人を援助す。

享和二戌　八十五才

正月四国堂竣成。二月開眼法会、同月「四国堂心願鏡」及び「懺悔経諸鏡」起草。三月故郷を発ち信州に入る。諏訪郡長地村に留まり刀を執る。上州に入り年末三国峠を越え越後に入る。

享和三亥　八十六才

正月「心願歌集」成る。三月「木喰浮世風流和讃」成る。四月越後古志郡東山村小栗山に留まる。六月同所観音堂本尊三十三体仏彫像にかゝる。八月成就開眼。十月北魚沼郡今泉真福寺。後再び小栗山に戻る。

享和四子（文化元）　八十七才

三月小出町正円寺。四月刈羽郡上小国村太郎丸真福寺二天尊の大作成就。五月下旬三島郡関原村白鳥宝生寺に入る。六七両月三十三体仏作。八月下旬刈羽郡鯖石村西野入安寺に留まる。九月十月同寺にて三十三体仏作。隣村田尻村安田鳥越大日堂本尊作。十月下旬枇杷島村沢田に入り十王堂建立、十王尊その他作る。

文化二丑　八十八才

正月大洲村洞雲寺の為道元禅師像作。二月中頸城郡米山村大清水大泉寺に入る。真言宗開祖弘法、興教大師像、立木地蔵等刻す。三月下旬東頸城郡保倉村大平大安寺に入る。十六羅漢、米寿自刻像等作る。熊谷を経て刈羽郡高浜村椎谷坂ノ下観音堂に十三仏を刻む、六月也。後、三島郡に入り転じて八月南魚沼郡に

文化三寅　八十九才　入る。九日町、塩沢町その他各地に多くの遺作をのこす。
再び三国峠を経て上州に入りしと覚ゆ。四月信州諏訪郡に入る。八月故郷にあり。秋十月、丹波国船井郡畑中村清源寺に留まる。十二月十日未明霊夢を感じこの日以後「神通光明、明満仙人」と号す。十一月廿七日弟子丹海佐渡に歿す。

文化四卯　九十才　三月丹波国船井郡高原村富田竜泉寺に釈迦、阿難、迦葉の三尊を刻む。併びに九十才自刻像、同月下旬摂津国川辺郡中谷村に入る。阿古谷毘沙門堂、北田原東光寺等に廿数体の仏像を遺す。秋再び信州諏訪に入る。

文化五辰　九十一才　三月甲州善光寺に大幅阿弥陀如来を画く。四月中旬甲府市教安寺に七観音作る。（之以後の事跡未詳）

文化七午　九十三才　六月五日寂

（この年譜は柳宗悦著木喰上人「木喰五行明満上人年譜」による）　完